



P.2-3

無限の可能性を秘めたあなたに 100歳の医師が伝えたいこと

聖路加国際病院理事長

日野原 重明



P.4-5

634mの夢舞台 東京スカイツリーを 裏で支える

東武タウンソラマチ株式会社



広報担当

三井 翔太



商業運営担当

平山 里美

P.6

“今”に活かす勉強

宣伝会議

コピーライター養成講座



NPO法人
アイセック・ジャパン
専務理事 兼 事務局長
高橋 諒



SOLA 代表
早川 紘平

P.8

プロフェッショナル 仕事の流儀

番組立ち上げ秘話を語る

NHKチーフプロデューサー

有吉 伸人



P.8

編集後記

(敬称略)

働くとは

日野原 重明

聖路加国際病院理事長



未知に挑む 姿勢を

にこやかな表情で自身の人生を振り返る日野原氏

人は生きていくうちに、その人になっていく——。

聖路加国際病院理事長の日野原重明氏は、生まれてから100年の、

特に働き始めてから70余年の日々の積み重ねが、

今の自分を仕上げたと説いている。

氏は100歳を迎えた今もなお、現役の医師だ。

その活動の傍ら、子どもたちへの「いのちの授業」や、

「新老人の会」の講演会に全国各地を廻る、多忙な日々を送っている。

生き生きと現役を全うする原動力は、いったいどこからくるのだろうか。

日野原氏の、人生経験から見出した「働く」とは。

次代を担う者への思いとともに、伺った。

日々、進化していく

日野原氏と大学生との歳の差は、約80歳。我々の価値観と比較するために、学習院大学生に対して人生観に関するアンケートを実施した。その中で「卒業後にどのような生き方をしたいか」を聞く項目には、「無事就職」という答えが圧倒的に多かった。これは、就職難の現状を反映した結果と言える。

将来の進路に悩む学生たちに対し、日野原氏は「社会で働くというのは“働く”ことから学んで自己を成長させるということ”だと思います。ですから、ただ有名な企業に入れば素晴らしい人生、というわけではないと私は思うのです」と視野を広く持つことを促した。

氏の学ぶ姿勢は、学生の時から培われたものだったようだ。幼い頃から読書家だった氏は、医学部に入ってから、熱心に知識を深めていく。専門分野以外で

も、興味のある学問は聴講するなどして自分の糧にしていったという。

「河上肇先生の経済学や、西田幾多郎先生の哲学講義を受けました。現在、本業以外にも様々な仕事ができているのは、若い頃の学習過程で染み込んだものがあるおかげです」。

今でも、自分の行動範囲を広げていく日野原氏。その飽くなき挑戦心には、私たちも見習うべき部分があるだろう。

生き方のモデルを持つ

人生は、選択の連続だ。日野原氏は、医学部在学中に医者への夢を諦めかけた。音楽家を目指すか悩んだという。迷いが生じた時、今まで氏はどのように決断を下してきたのか。そこには、日々の習慣が関係しているようだ。

「僕の尊敬する人は、こういう時はどうしたのだろうか、と常に考えながら過ご

しています。そこに、生きていく上でのヒントがあるんですよ」。

生き方の理想のモデルを持つことで、分岐点に立たされた時の指針としているそうだ。氏にとってのモデルの1人とは、アルベルト・シュバイツァーだ。彼は神学者であり、演奏家としての名声がありながら、医学校に入り直して医師となった。アフリカ赤道直下の国で、現地の患者のために献身することを選んだのだ。モデルの生き方に刺激を受けながら、少しでも近づくために努力を続ける。その過程が、自身のスキルアップに繋がると氏は語る。

さらに、集中して本を読むことが必要であると説く。「皆さんには学生でいるうちに様々な人の本を読みながら、“何がこの人にとって重要なのか”ということを求める気持ちを持ってもらいたいです。大学の講義も同じです。ただ受け身でいるのではなく、ひたむきに考え抜く姿勢が大切だと思いますね」と日常の心掛け次第で、自己成長に繋がることを教えてくれた。

考えることは「人間に与えられた最高の賜物」と日野原氏は語る。動物が本能的に行動するのに対し、人間は考えて行動する。これが万物の霊長といわれる所以であり、若い人にも熟考する習慣をつ

けてほしいと氏は話す。

生涯現役宣言

百歳を迎えた日野原氏は働くこと、ひいては生きることに對して、どのような価値観を抱いているのだろうか。

「何歳まで働いて、何歳まで生きたいか」について本学学生に聞いてみたところ、60歳まで働き、80歳まで生きたいとの回答が多く見られた。学生からすると、定年で退職し、後は20年ほどゆっくり暮らせれば良いといったところだろう。

この考え方を日野原氏は否定し、「私は60歳になる少し前に、よど号ハイジャック事件に遭いました。この事件を通して私の生き方は大きく変わったのです」と人生の転換期について語る。

1970年、氏は福岡で行われる学会に向かうため、よど号に搭乗していたのだ。「犯人グループがダイナマイトを所持していると言ったため、私は命の危機を感じました。しかし、ふと『どんな時も平静の心を保っていなさい』という医学者ウィリアム・オスラーの言葉が頭に浮かび、自らの命を天に任せる覚悟をしました。そうして空港の土を踏んだ時、生きた実感を取り戻しましたね」と当時を振り返った。

あなたの“働く”を見つけよう

■ おすすめの一冊

チャレンジすることの大切さ

働く。
社会で羽ばたくあなたへ富山房インターナショナル
定価：本体1300円＋税

ISBN978-4-902385-87-8

本書は、日野原氏が大学生やニート、引きこもりなど様々な境遇にある若者と行った座談会の様子をまとめたものである。氏は自分の経験を通して、働くことや生きることについて考えてほしいと思ひ、出版に至ったという。

日野原氏は、人生観について話し合うなかで、今の若者は変化していく自分に漠然とした不安を抱いていると感じたそうだ。そこで、働くことについてどのようなイメージを抱いているのか問い掛けた。

すると、「自分を見つける一歩」「もらえばかりの幸せな枠から抜け出すこと」「与えられる側から与える側になること」など、様々な答えがかえってきた。氏は、彼らの言葉から、働くことによって自分の役割が転換するだろうという覚悟を感じた。

私たちは、社会の中で役に立つ存在でありたいと願っている。しかし、就職活動が早期化している現代、若者は「自分に何ができるのか」。その答えを見つけようと焦っている。悩める若者に対して日野原氏は、「人は一生をかけて、自分の人生を賭ける価値のある仕事を模索する存在なのだろう」とメッセージを残している。

ページをめくるにつれて、働くことへの不安は薄れ、前向きな姿勢を持つことができるだろう。

見返りに「一歩を踏み出せば、見えてくる景色が変わります」とあるように、氏の厳しくも優しい言葉があなたの行動を後押ししてくれるはずだ。

この時、氏は「私の命はここから始まるんだ。与えられた命として、これからは人のために尽くしていきたい」と強く思ったそうだ。

帰国後、哲学者のマルティン・ブーバーの「始めることさえ忘れなければ、人はいつまでも若い」という箴言から“始”を“創”という漢字に当てて、座右の銘とした。“創める”という言葉には、物事を始めることだけでなく、新しい人生を創造していくという意味も込められている。

「何か新しいことをしようとする時、この言葉が私の背中を押してくれます。アンケートにあるような60歳で現役を引退というのは、いささか安易ではないかと思ひます。未来というのは無限の可能性を秘めていて、60歳を過ぎても新しい人生を歩むことができる。若い世代の皆さんには、そういった考えを持ってほしいですね」と語った。

100歳になっても新しいことを始めようとする行動力に満ちた人生は、私たちがこれから生きていく上での一つのモデルとなるだろう。

日野原氏にとって“働く”とは

還暦を前にして第二の人生を歩み始め、現在も医師として業務をこなす日野

原氏。その元気に働く姿は、私たちとしては衝撃であった。

70年以上、働き続けてきた氏から、これから社会に羽ばたく若者に激励のメッセージをいただいた。氏は「夢を持ちなさい、という言葉皆さんに贈りましょう」と滑らかに筆を走らせた。その力強く書かれた文字からは、100年という年月の重みとともに、次世代に託した思いが感じられた。

未来を担う者たちへ

「未知に対して挑むことで、失敗や挫折がプラスの体験に転換されることがあります。日々変化をしていく自分に関心を持ち、変化を恐れないでいることが大切です」と日野原氏はアドバイスをしてくれた。さらに、どんな一歩でもいいから、勇気を持って踏み出してみるようにとエールを送ってくれた。未知なる未来に向けて歩み出すことで、世界は可能性に満ち溢れていることに気づくだろう。

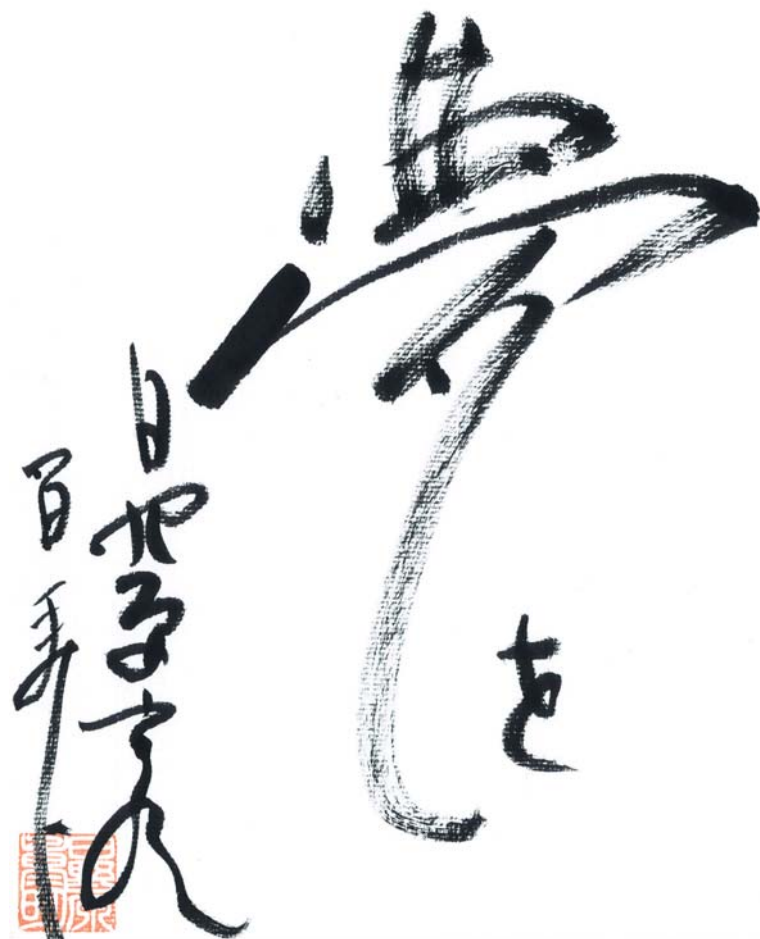
これから社会に出ていく私たちは、何かしらの不安を抱えている。それでも、必ず明るい未来があると信じて突き進んでほしい。夢を持って生きること、人生はきっと輝かしいものとなるに違いない。

P R O F I L E



ひのはら しげあき

1911年10月4日生まれ。37年京都帝国大学医学部卒業。41年聖路加国際病院に内科医として赴任。51年米国エモリー大学留学。92年聖路加国際病院院長を経て、現在、同名誉院長、同理事長。これまでに人間ドッグの提唱、医師の卒後教育や看護教育、予防医学、全人医療、終末期医療の発展に尽力。95年「地下鉄サリン事件」では陣頭指揮を執り聖路加国際病院に640人の急患を収容する。98年東京都名誉都民。99年文化功労者。2000年に「新老人の会」を結成して会長に就任。2005年文化勲章受章。著書に『生きかた上手』『十歳のきみへ——九十五歳のわたしから』など多数。



働く × 支える



鮮やかな2色で
墨田区の空を彩る
スカイツリー

自分も周りも活か

輝かしい成功の裏には、欠かすことができないサポート役の存在がある。それは、今年の5月に開業した東京スカイツリータウン®にも当てはまる。誕生したばかりの東京のシンボルを、オープン前から現在に至るまで、縁の下で支え続けているお二方のお話を伺った。

仲間やお客様と共に楽しむ

東武タウンソラマチ株式会社の平山里美さんは、東京スカイツリータウン®の商業施設「東京ソラマチ」の運営に携わっている。具体的な業務内容は、食品フロアの構成や運営をすることだ。

「どんな方にも楽しんでもらえる施設を目指しています。絶えず変化するお客様のニーズに応じていくフロア作りには、とてもやりがいを感じていますよ」。平山さんは、働く側の人々にも配慮したフロア運営を心掛けている。

彼女は食品フロアに常駐し、出店者や従業員と直にコミュニケーションを取っている。彼女が現場の悩みや要望を聞き、的確なサポートをしていく。すると、従業員のモチベーションが向上し、店舗は活気に満ちていくのだ。

「お客様にこの施設の魅力を感じてい

ただくためには、私を含め、働いている側も楽しくしているべきだと思います。スタッフにもお客様にも、楽しい場と思っていただければ、幸いですね。

「支える」ことは、一方的に相手に尽くすことではない。自分も心から楽しむからこそ、快くサポートできるのだ。相手のことを真剣に思う姿勢が伝わって、仲間は期待に応えてくれるのだろう。

多方面との連携を大切に

同社において広報担当をしている三井翔太さんも、周囲とのコミュニケーションの大切さを説いている。

「何かを支えるためには、周囲とうまく連携を取ることが重要だと思いますね。まず、平山さんのような各店舗をマネジメントする方や、飲食店などの各店舗を営業する方々と打ち合わせをする。そしてイベントや見どころを発表する時期や方法、内容を決めます。その後、決定事項を関係部署と一つずつ着実に実行していく。そうすることで、メディアに取り上げてもらえ、スカイツリーやソラマチを支えることに繋がるのです。

また、三井さんたちはマスコミ関係者との連携も重視している。

「メディア関係の方々が、我々の取組みを紹介してくださるおかげで各店舗が有名になっていく。そう考えると、支える側にいると思っていた我々の方こそ、支えられているのかもしれないね。

彼の言葉は「人は絶えず誰かをサポー



商業運営担当

平山 里美



連日、多くの人々で賑わうソラマチ

す精神



広報担当

三井 翔太

トし、サポートされている」ということを教えてくれる。

社会へ踏み出す学生たちへ

就職活動が迫るなか、志望する業種や会社が決まらず、悩んでいる学生は多いだろう。そんな学生たちに向け、三井さんは「自分の頭で考えるだけでは限界があるので、行動あるのみという姿勢を心掛けてください。常に動きながら悩み、自分の考えを修正していくことで、就きたい会社や職業が見えてくるでしょう」と語る。

一方で平山さんは、進路が決定し、来年の4月から働き始める学生に向け、助言をしてくれた。

「まず始めに、日々の業務の中で、自分が充実できる瞬間を見つけてください。そうすれば、仕事にやりがいを感じられますよ」。

自分は希望の職に出会えるのか、就いた職を好きになれるのか、不安は尽きないだろう。そんな時は、社会で活躍する2人からのメッセージを心に留め、前向きな気持ちで歩んでほしい。



東京の新たなシンボルは、街により一層の魅力を与える

働く × 学ぶ

社会に出たとしても、そこで学びが終わるということはない。

昨今、キャリアアップなどの目的から、

大学院やビジネススクールに通う

社会人は着実に増えている。

多忙な生活のなか、働きながら学ぶ意義とは何だろうか。

広告界向けのスクール

『宣伝会議 コピーライター養成講座』に通う

小川あゆみさん、小泉暁子さん、坂口裕樹さん、

そして講師の野原靖忠さんにお話を伺った。



「良いキャッチフレーズとは」の問いに多くの意見が飛び交う講義

自身の展望を 見据えて

株式会社電通 関西支社 TOKYO ROOM
クリエイティブ局
クリエイティブ・ディレクター/
コピーライター

野原 靖忠



PROFILE

のほら やすただ

1963年、京都府京都市生まれ。87年、同志社大学文学部を卒業し、同年電通入社。パナソニック、セキスイハイム、NTTドコモなど多数の広告を手掛ける。朝日広告賞、毎日広告デザイン賞、TCC新人賞などを受賞。現在も、業界の第一線で活躍し続けている。

宣伝会議 コピーライター養成講座

「久保田宣伝研究所」を母体とし、1957年に開かれた日本で最初のコピーライター養成機関。一流の講師陣のもと、広告クリエイティブに関する総合的な知識とノウハウを学ぶことができる。全国で年間1000名以上が受講し、糸井重里氏や仲畑貴志氏など、多くのクリエイターを広告界に輩出している。

スキルアップを目指して

今回ご協力いただいた方々は、皆、広告界で働いている。小川さん、小泉さんはデザイナー、坂口さんは営業職に就いているそうだ。

受講の理由を伺うと「広告をデザインする上で文章を扱う時も多いのですが、私は書き物が不得意なんです。キャッチフレーズについて学んで、苦手を克服できればと思いました」と小川さんは話す。お話を伺った3名は、コピーを作成する職業に就いているわけではない。実際、受講生の中でもコピーライターは少ないとのこと。小川さんのように、現在の職に活かすべく受講する人が多いのだろう。

学びから得るもの

当初、受講生の方々は「書く力」が伸びると思っていたそうだ。しかし、実際はそれ以上に「考える力」が身についたという。「コピーを作る課題では、色々な切り口から思考することが求められます。その結果、視野が広がりましたね」と小泉さんは話す。

これは、講義がコピーの書き方よりも、その本質に重点を置いているためだ。講師の野原さんは「優れたコピーには、新しい考え方が含まれています。良い作品を生み出そうとする過程で、モノの見方が広がるのでしょ」と語ってくれた。

働きながら学ぶ意義

充実した勉強とはいえ、仕事との両立は辛い点だ。3名とも土曜を学業の時間に充て、平日は仕事に集中するそうだ。



「学んだことを社会に還元したい」と語る小川さん④と坂口さん⑤

休日を返上してまで学ぶ価値とは、いったい何だろうか。

坂口さんは「学生の頃に得た知識より、実践できる点が魅力」と言う。さらに「広告の捉え方を理解した上でお客様に接すると、説得力が増すように思います。これは、社会人だから得られる満足感ですね」と力強く話してくれた。

自身の成長のため、目的を持って学ぶ姿が印象的だった3名。野原さんは「学生と違い、社会人には目標が与えられません。自ら設定する必要があります」と語る。自発的な行動だからこそ、学ぶビジネスマンは輝いて見えるのかもしれない。

働く × 学生

いつでも志を高く

学生が主体となり、海外インターンシップ事業を展開するアイセック。日本支部の代表を務める高橋さんは、活動を通じて広い視野で物事を見られるようになったという。その背景には、大学1年時のインドでのインターンシップの経験がある。

挫折から学ぶ

「少しでも現地の貧困をなくす」と意気込み、スラムでの英語教育に挑んだ高橋さん。教育の機会を提供することは、自立した人材を生むことに繋がる。

しかし、いざ授業を始めると生徒からは相手にされない。焦燥感や挫折を味わうなか、現地で活動する日本人女性からの言葉が、胸に突き刺さった。

『私でさえ、25年間ここにいてまだ何も変えられていない。それなのに、君がたった数カ月で何かを変えようとするのは、自己満足じゃないのか』。

自分の浅はかさに気づかされたとい

う。そこからは心機一転、目の前のことを見つめ直して行動を起こしていく。

中でも、時間割を作ることに苦労したそう。授業内容は当日決まり、先生が来ないこともあるため、生徒の勉強量に偏りがあった。価値観の違いに悩まされながらも、現地の人が使いやすい形的时间割を作成し、学習効率を向上させる。

他にも、個別指導や家庭訪問を実施。周囲とのコミュニケーションから問題を発見し、解決のために奔走する日々だった。

「自分にできることを着実に積み上げていけば、大きな成果になると実感しました。普通の大学生の僕が、ここまで物事を発展させられたことに、充実感を覚えましたね」と振り返る。

インターンシップ以来、挫折は“嫌なもの”ではなく“自分の味方”と考えられるようになったそう。

この経験を自分だけで終わらせずに他の学生に届けたい。そう考えた彼は、日本の高校や大学で講演を行っている。

日本の未来を考える

現在、1800人ものメンバーの代表を務める。かつてないプレッシャーのなか、彼が掲げる目標はアイセック・ジャパンとして「日本の未来を切り拓く人材」を多く輩出すること。その挑戦をしていくことが、自らの成長に繋がるといふ。

「三つの要素を兼ね備えた人を考えています。“理想を明確に描けること”“それを実現するために、立ち足る障害をも壊す勇気”。最後に“リーダーとして人を巻き込む力”です。これらは、アイセックの活動を通して身につくことだと思います。僕も、このような人になりたいですね」。

彼にとって働くとは何かと問うと、将来の指針とともに語ってくれた。

「日本をもう一度世界に誇れる国にすることです。この理想を追い求めていくことが、僕にとっての働く意味です。今後、手段は変わっても、この信念は変わることはないでしょう」。

海外の人と協働するアイセックの活動が、自分自身やそれを取り巻く環境を相対的に見つめ直すきっかけとなったそう。

日本社会の未来を国内外から見据える彼の挑戦は、これからも続く。



NPO法人
アイセック・ジャパン
専務理事 兼 事務局長
高橋 諒
(慶應義塾大学4年)

撮影協力：rooz cafe

日本を世界に
誇れる国にすること。



④ インターン先の生徒たちと
⑤ インドの大学でアイセックの活動をプロモーションした

アイセック

海外インターンシップ事業を通して、次世代を担う学生を育成する世界最大規模の学生組織。現在は世界110国と地域で2100大学以上に委員会を持つ。その中でアイセック・ジャパンは50年の歴史を持ち、年間約500名の学生を海外に送り出している。

農業の可能性を信じて

7月某日、筆者は茨城県の農場にいた。日本の農業に一生を賭ける学生委員会、SOLAの活動を取材するためである。

照りつける太陽の下、時折吹き抜ける風が涼しげに木々を揺らす。雄大な自然の中で、農業をする喜びを知った。

若者と農業

今回、茨城で行うのは農業体験のイベント。当日は、大学生5人が集まった。

「こまめに水分補給をして、倒れないようにしてくださいね」。畑に入る前、冗談めかして注意を促すのは、早川紘平さん。SOLAの代表であり、このプログ

ラムの主催者である。大学で卒業論文の準備をする傍ら、団体の舵取りを担う若き活動家である。

そんな彼も、半年ほど前に活動に加わった新参者だ。代表になった当初は、個々人の総意をいかに汲み取るか、悩む日々だったという。そこで、対話を重視し、目標を共有できるように働き掛けた。話し合いを重ねるにつれて、団体の方向性が定まってきたと確信している。

いざ農作業

さっそく、早川さんの指示でネギ畑の草取りが行われた。ただの草むしりと侮ることなかれ。真夏に中腰で腕の筋肉を酷使する作業は、まさに重労働である。倒れないように、との代表の言葉は、ジ

ョークではなく警告だったと気づく。

数時間の作業の後、畑を管理する卒業生が昼食をふるまってくれた。大量の汗を流して乾ききった我が身に、爽やかなそうめんが染みわたる。朝とれたばかりの野菜も食卓に並び、実に贅沢な昼食となった。

午後一番で取り組んだのは、ジャガイモの収穫。自分の手で収穫することで、普段見慣れているこの野菜が、この上なく愛らしく思えてくるから不思議だ。作物の成長を見守ってきた農家の方々にとって、この思いは格別のものだろう。

反省会の後、収穫した野菜を車に積み込んでいく。東京の八百屋に並ぶのを見届け、一同は解散。帰路についた。

一日の終わり、筆者は働くことの意義について代表へ質問をした。「周りの人や社会を幸せにする営み」という点にそれはあると彼は考える。そして、自分たちの成果が消費者の笑顔に繋がっている農業は、まさに働くことそのものであるという。他者の幸福を考えることは、全ての職業を貫く普遍的なテーマと言えるだろう。

たった一日の体験で、農業の醍醐味を味わえるこのイベント。あなたも参加してみたいかがだろうか。



④ スコップを片手にジャガイモを掘り起こす参加者
⑤ 傍らのネギを傷つけないように、丁寧に草を取り除く

SOLA

2006年に産声を上げた東大初の農業サークル。以来、「日本の農業に一生を賭ける」をモットーに、様々な取り組みにチャレンジしてきた。現在は、東大、農大、家政大や明大などの学生も加わり、インカレとして運営されている。



SOLA 代表
早川 紘平
(東京農業大学3年)

人のためになる
生き方を
追求すること

働く × 追う

NHK チーフプロデューサー
有吉 伸人

働き方の多様化に拍車がかかる現代において、職業人を追うテレビ番組も多い。NHKエンタープライズに在職する有吉伸人氏は、働き方をクローズアップしてきた1人だ。有吉氏は「プロジェクトX 挑戦者たち」のほか、多くのドキュメンタリー番組に関わってきた。「プロフェッショナル 仕事の流儀」ではチーフプロデューサー(制作統括)として番組を企画、制作指揮を執った。企画者だからこそ感じる苦悩とは何であったのか。そして、ドキュメンタリーに懸けた情熱はいかにして番組の礎となったのか。生み出した者こそが知る真実を語っていただいた。

仕事の奥深さに迫る



自らをワーカホリックであると語る有吉氏。一流の仕事人に見たものとは

働くことは
生きること
かな?

挑戦の番組企画

現代に生きる仕事人の姿を切り取る「プロフェッショナル」は、ドキュメンタリー番組の真骨頂とも言える。有吉氏は、そんな一流の仕事人への興味が番組誕生の契機と語る。

「過去の出来事を残された資料から再現する『プロジェクトX』と違い、進行形でカメラを回したら面白いのではと思っていました。前番組がチームを取り上げていたのに対し、個人を取り上げたことも、個人の重要性が増す時代を見据えてのことでした」。この企画は氏の思い

を乗せ、2006年、新番組として快調に滑り出すのである。

番組収録に際して「時間をやりくりし、毎週無事に放送するのが一番のハードルでした」と語る。時間と品質の狭間で、ドキュメンタリーの難しさを痛感した。また、想定外の事態も起こりうる。しかし、これらを進行形の仕事を追う醍醐味と捉え、面白さを感じたそうだ。

心に秘めたもの

有吉氏は、ドキュメンタリーには困難な取材が付き物であると言う。「仕事の

本質は言葉に表しにくいものです。だからこそ、他人が理解することは難しいのです」と語る。これこそが、ディレクターの腕の見せどころなのであろう。

また、客観性も重要である。「1人のディレクターが取材するのですが、そこには必然的に本人の先入観が入ります。そのため、独自の方法をとっていました」。それはプロデューサーとディレクターが編集段階まで基本的に打ち合わせをしないこと。プロデューサーが、まっさらな目で編集中の映像を見ることで、視聴者と同じ視線を維持していたのだ。

番組で取り上げた数々のプロフェッショナルに共通することがある。それは「一流の人でも悩み抜いている」ことだった。「ハイレベルの人にはハイレベルなハードルがあります。それを乗り越える姿勢が重要です。このことを知り得たのは大きかったです」。

ドキュメンタリーはプロの本質を見極めることが肝心。そしてそれに注ぐ情熱も、やはり言葉には言い尽くせないものがあるようだ。放映時間48分に懸けた思いを語るその眼差しに、プロ魂の片鱗を見ることができた。

編集後記

今、それぞれの道へ歩きだす

昨年10月、産経EX・Campus新聞大賞にて「タブロイドCPS賞」を受賞し、副賞として弊紙発行に至った。

学習院大学新聞社を引退した仲間が、再度集結。一つのものを作り上げることができ、大きな喜びを感じている。

「働くとは？」
この一つの問いに対し、それぞれの方が全く違う答えを示してくれた。導き出された考えのどれにも、生

き様を感じさせるストーリーがあった。

社会に出れば、学生という守られた立場ではなくなる。恵まれた環境から抜け出し、自分の足で確かな一歩を踏み出していかなければならない。その挑戦の先に何があるのか、一歩先に行く先輩方に教えてもらった。理想と現実の狭間で奮闘する姿に、勇気ももらった。自分自身の人生についても、考えさせられる編集作業だった。

素晴らしい機会をくださり、常に学生目線で対応し



てくださった産経新聞社の方々。ご多忙なか、取材に応じてくださった皆様に、深く感謝申し上げます。

最後に、読者の皆様にとって、弊紙が今後の挑戦の後押しとなれば、幸いである。